太陽シリーズ

太陽正倉院シリーズ I

◉監修＝松本包夫

シルクロード旅情　かたちと素材　聖なる獣たち
樹下美人たち　うたげ　狩猟・連珠・樹下動物　唐草と咋鳥

正倉院とシルクロード

太陽正倉院シリーズ Ⅰ

●太陽シリーズ㉕
●目次

●監修＝松本包夫 ●図版選＝松本包夫 河田 貞 井口喜晴 百橋明穂

正倉院とシルクロード

●カラー

シルクロードと五絃琵琶 陳 舜臣 4
シルクロード旅情 6
シルクロード地図 10
かたちと素材 12
シルクロードと正倉院 平山郁夫 22
聖なる獣たち 26
樹下美人たち 32
うたげ 36
狩猟・連珠・樹下動物 40
正倉院・シルクロードの終着駅 林 良一 46
唐草と咋鳥 48
シルクロードを渡ってきた伎楽 笠置侃一 54

染織 83
工芸 96
絵画 107

●本文

染織／その西方的要素 松本包夫 63
工芸／多彩なる西域の影 河田 貞 69
絵画／異国のロマンの香り 百橋明穂 76
ガラス／輝きの源流 深井晋司 119
咋鳥／含綬鳥文の系譜 井口喜晴 123
対談 撥鏤——凍れるシルクロード 松本包夫／吉田文之 130
作品解説 松本包夫／河田貞／井口喜晴／百橋明穂 136
表紙・扉掲載作品解説／編集室 146

表紙＝螺鈿紫檀阮咸（部分）正倉院蔵
●写真＝陳立人／鄧健吾／百橋明穂／並河萬里／室靖男／矢沢邑一／矢野建彦／芸艸堂／大塚巧芸社／坂本写真研究所／便利堂／中国・文物出版社／宮内庁正倉院事務所
●装画＝藤田道世
●地図製作＝森下暢雄
●編集スタッフ＝松本保／佐藤信二
●レイアウト＝スタジオ・ギブ

◎掲載品所蔵者・編集協力

三彩／楽人をのせた駱駝　中国歴史博物館蔵
螺鈿紫檀五絃琵琶　正倉院蔵
楓蘇芳螺鈿槽琵琶　正倉院蔵
木画紫檀碁局　正倉院蔵
木画紫檀雙六局　正倉院蔵
漆胡瓶　正倉院蔵
佐波理水瓶　正倉院蔵
白瑠璃瓶　正倉院蔵
白瑠璃碗　正倉院蔵
紺瑠璃坏　正倉院蔵
緑瑠璃十二曲長坏　正倉院蔵
銀製八曲長坏　テヘラン考古博物館蔵
紺玉帯　正倉院蔵
犀角黄金鈿荘如意　正倉院蔵
平螺鈿背円鏡　正倉院蔵
銀製長坏　テヘラン考古博物館蔵
茶地犀連珠文錦　正倉院蔵
銀製水さし　エルミタージュ美術館
龍首水瓶　東京国立博物館蔵
銀製水瓶　テヘラン考古博物館
春苑奏楽　ニューデリー美術館
鳥毛立女屏風　正倉院蔵
楽舞図　東京国立博物館蔵
紫檀木画槽琵琶　正倉院蔵
紫地獅子奏楽文錦　正倉院蔵
銀皿　狩をするシャプール二世　エルミタージュ美術館
銀壺　正倉院蔵
獅子狩文錦　法隆寺蔵
赤地獅鳳文錦　東京国立博物館蔵
赤地格子蓮花文錦　東京国立博物館
花樹対鹿文錦　個人蔵
羊木鷹纈屏風　正倉院蔵
獅子使い文綾　正倉院蔵
金平文唐太刀　東大寺蔵
黄地葡萄唐草文錦　東京国立博物館蔵
葡萄唐草文白綾　正倉院蔵
鳳凰獅子図　ギメ美術館蔵
鞍褥　正倉院蔵
螺鈿紫檀阮咸　正倉院蔵
鳳凰文浮彫り光背　法隆寺蔵
鳥獣花背八角鏡　正倉院蔵
獅嚙連珠円文刺繍　叡福寺蔵
連珠双鳥文錦　新疆維吾爾自治区博物館蔵
猪頭文錦　新疆維吾爾自治区博物館蔵
連珠天馬騎士文錦　新疆維吾爾自治区博物館蔵
双鳥連珠文黄綾　正倉院蔵
紫地鳥獣連珠文錦　正倉院蔵
赤地小花連珠文錦　正倉院蔵
双竜連珠文緑綾　正倉院蔵
白茶地双鳥連珠文錦　正倉院蔵
双竜唐草円文緑綾　正倉院蔵
紋染薄絹　新疆維吾爾自治区博物館蔵
緑地狩猟文錦　東京国立博物館蔵
緑地狩猟連珠円文錦　正倉院蔵
樹下双鳳双羊文綾　正倉院蔵
浅緑地鳥獣花卉文錦　正倉院蔵
紫地花卉双羊文錦　正倉院蔵
花喰鳥鷹纈屏風　正倉院蔵
紺地花樹双鳥文夾纈絁　正倉院蔵
緑地菱襷含綬鳥文鷹纈絁　正倉院蔵
紫地鳳唐草丸文錦　正倉院蔵
最勝王経帙　正倉院蔵
紫地象文錦　正倉院蔵
緑地花鳥文錦　正倉院蔵
銀壺　東大寺蔵
染革　東大寺蔵
薬師像台座　薬師寺蔵
鳥獣花背方鏡　正倉院蔵
平螺鈿背八角鏡　正倉院蔵
撥鏤碁子　正倉院蔵
紫檀小架　正倉院蔵
金銀花盤　正倉院蔵
蘇芳地金銀絵箱　正倉院蔵
紅牙撥鏤尺・緑牙撥鏤尺　正倉院蔵
沈香金絵木画水精荘箱　正倉院蔵
曝布彩絵半臂　正倉院蔵
檜和琴の琫瑁絵　正倉院蔵
漆金薄絵盤　正倉院蔵

●

宮内庁正倉院事務所・東京国立博物館・奈良国立博物館・日本放送協会・中国文物出版社
エルミタージュ美術館・ギメ美術館・法隆寺・東大寺・薬師寺・京都フィルムエージェンシー
橘照嶺・上野アキ・小林知己・藤田東樹・高橋隆博・飯田裕康

◎写真（番号はページ）
室靖男＝4～5　陳立人＝10・11・46～47
並河萬里＝18下・28右上・32　鄧健吾＝33・39　矢野建彦＝54～59　百橋明穂＝117

THE SUN Series No. 25

Shōsōin Series I

Shōsōin and Silkroad

This series introduces the Shōsōin Treasures in Nara, Japan which are said to be a world treasury. The series consists of four volumes and the first one is depicting the relationship between the Shōsōin Treasures and the Silkroad as seen from the title "Shōsōin and Silkroad". Shōsōin is said to be the terminal station of the Silkroad, but in this volume, not only the treasures of the Shōsōin but also a lot of articles excavated in China, Iran and in many other countries are being introduced. The treasures of Shōsōin are the works manufactured in the eighth century and they are not excavated articles but have been passed down to us still retaining what they looked at that time. These are really unique treasures in the world.

Brief explanations of the contents in sequence of [illegible] follows:

* Journey along the Silkroad (Pp. 6～11)
  depicting longing for foreign countries
* Shapes and material (Pp. 12～21)
  showing the material which are nonexistent in Japan (e.g. ivories, glasses, jewels) and the shapes which are quite foreign
* Sketches of the Silkroad drawn by the painter, Ikuo Hirayama [illegible] (Pp. 22～25)
* Sacred animals (26～31)
  depictng sacred birds and animals such as bird, rhinoceros, pegasus, etc.
* The beauties under a tree (Pp. 32～35)
  figure of a beautiful woman lingering under a tree—examples from Persia and China
* Banquet (Pp. 36～39)
  scene depicting musicians and dancers
* Hunting (Pp. 40～42)
  people in chase of animals and comparing it with the Persian silver plate
* Renjin (Pp. 42 & 43)
  design of linking the circles
* Animals under a tree (Pp. 44 & 45)
  design of animals lingering under a tree
* Arabesque and a bird with a thing in its mouth (Pp. 48～53)
  design of a bird holding a grapevine arabesque, a flower and a [illegible] in its mouth
* Ancient Mask Show (Pp. 54～60)
  Ancient mask show, [illegible] down to Japan through the Silkroad, was [illegible] in the eighth century but after then it has almost [illegible] to exist. Stage pictures of revival performance of the Tōdaiji [illegible] in October 1980.

[illegible] (Pp. 83～95), Technical Art (Pp. 96～105) [illegible] (Pp. 106～117)

EDITOR: Tamotsu MATSUMOTO

正倉院とシルクロード

シルクロード――。それはなんという旅情にみちたことばだろう。蜿蜒（えんえん）アジア大陸を横断するこの行路は、往時の旅人たちにとって決してたやすいものではなかった。にもかかわらず、はるばるとこの道を辿ってわが国に伝えられた異国の香りは、こんにちのわれわれをさえ、限りないロマンの世界に誘わずにはおかない。

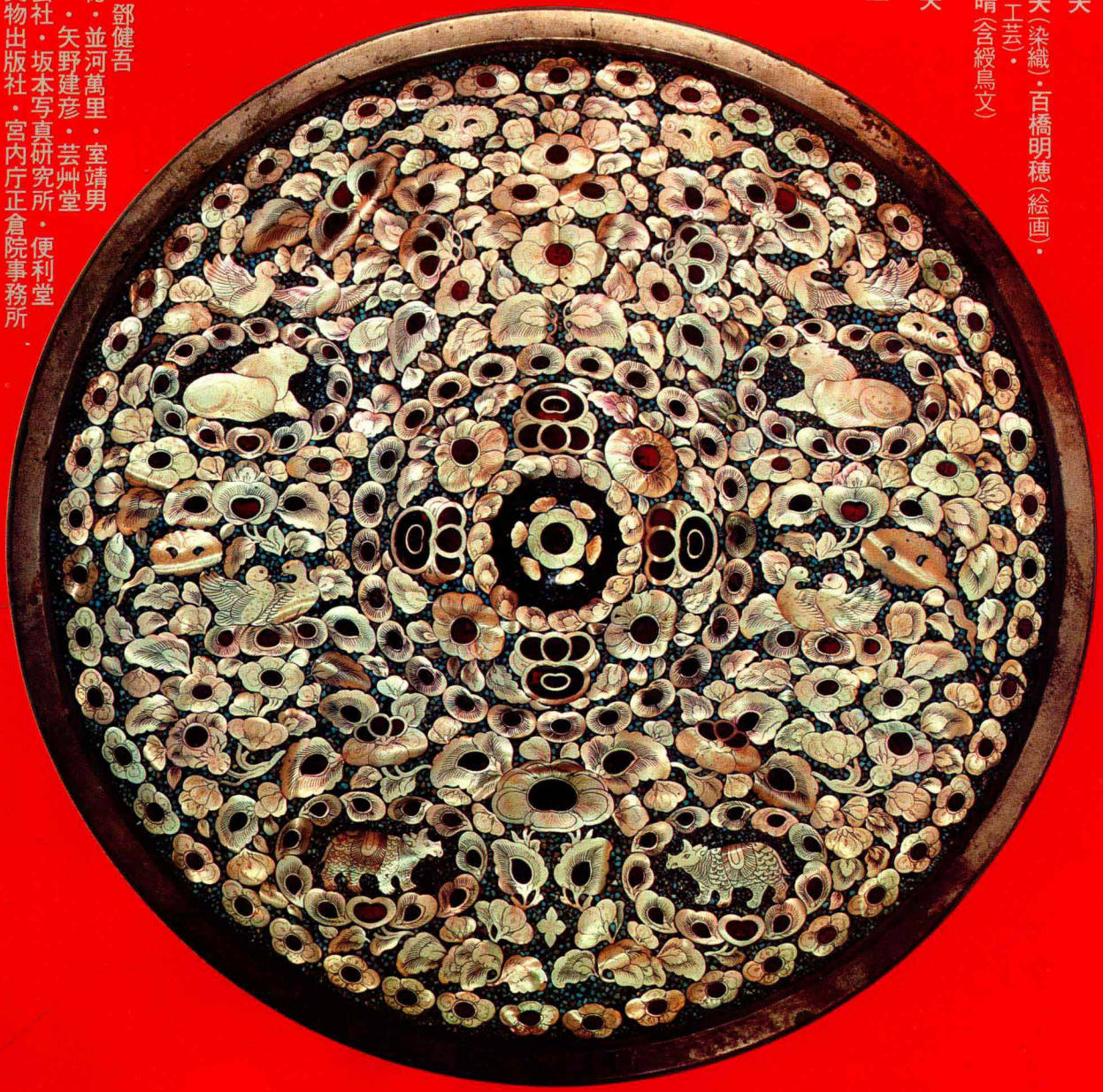
シルク・ロード。その果てるところに正倉院がある。ながい旅路のすえ、この宝庫に辿りついたかずかずの品、またさまざまな文様意匠は、それぞれに違った生まれ故郷の思い出をもっている。千数百年の星霜に耐え、この宝庫に伝えられてきた品々のうえに、その過ぎた日の思い出をいまよみがえらせよう。

監修＝松本包夫

図版選＝松本包夫（染織）・百橋明穂（絵画）・河田貞（工芸）・井口喜晴（含綬鳥文）

文＝陳舜臣・平山郁夫・林良一・笠置侃一

写真＝陳立人・鄧健吾・百橋明穂・並河萬里・室靖男・矢沢邑一・矢野建彦・芸艸堂・大塚巧芸社・坂本写真研究所・便利堂・中国・文物出版社・宮内庁正倉院事務所



シルクロードと五絃琵琶

陳 舜臣

正倉院遺宝のなかで、シルクロードのにおいの最も濃いものを一点あげよといわれたなら、私はためらわずに螺鈿紫檀製の五絃琵琶をえらぶであろう。

撥の当たる部分に、駱駝にのっている西域人のすがたがはめこまれている。その西域人は琵琶を弾いているが、劇中劇ならぬ琵琶のなかの琵琶という発想がおもしろい。琵琶を弾く人が、ふと目をおとすと、そこに琵琶を弾く人のすがたがある。それは胡人であるが、楽器をあやつるということで、弾く人はデザインのなかの楽人に親近感を抱くであろう。現実に胡人など見たことのない人でも、自分の分身然としたすがたに、ほほえむにちがいない。

奈良や平安の大宮人は、こんにちの私たちほどには、シルクロードの情報をもっていなかった。それだけに、別世界というかんじは、よけい強かったであろう。当時は別世界などということばはなく、「仙界」とでもいった語彙が彼らの脳裡にうかんだはずだ。仙界の人とのつながりに、言いしれぬ興奮をおぼえる。感受性のつよい人が、当時もかならずいたであろう。

正倉院には四個の琵琶が伝わっている。そのうちの二個が四絃琵琶で、そのほか阮咸とこの五絃とである。

唐代の中国でもそうだったが、日本でも琵琶といえば四絃がふつうであって、五絃は主流ではなかった。東大寺献物帳には、前記の二個の四絃琵琶は、ただ「螺鈿紫檀琵琶」「紫檀琵琶」としているだけである。そして西域の楽人が駱駝にのっているデザインのあるものは、とくに「螺鈿紫檀五絃琵琶」と、五絃であることをしるしている。

正倉院の二個の四絃琵琶は、じつは献物帳にみえたものではなく、失われてしまったのを弘仁年間（八一〇―八二三）に補ったものといわれている。四絃琵琶はよく弾かれたので、借り出されたりなどして、失われたのであろう。

五絃琵琶は、弾く人もまれで、ただ収蔵され、ときどき鑑賞されたにすぎない。やんごとない人たちが、ふと思いついてこれを抱え、弾くようなポーズをとったことがあるだろう。五絃琵琶はこのように抱かれはするが、弾かれることはほとんどなかった。弾き方を知る者もいなかったのだ。

四絃はイラン系で、五絃はインド系の琵琶であるといわれている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四絃琵琶はイランからガンダーラを経由し、シルクロードによって唐にはいり、さらに海を渡って日本に伝わった。唐代はインドから海路によって広州や泉州にいたる交易も盛んであった。五絃琵琶は海路、唐に伝わったケースもあっただろうが、主流はやはりシルクロード経由であったにちがいない。その証拠に、唐では五絃琵琶のことを「亀茲琵琶」と称していたのである。亀茲はいうまでもなく、天山南路のオアシス都市で、古来、歌舞音曲の地として知られた庫車(クチャ)のことである。玄奘三蔵は屈支と書いているが、おなじ土地なのだ。

唐代の百科事典である『通典』に、

——五絃琵琶、稍小なり。

とあるが、まさしく正倉院の五絃琵琶は、四絃のそれよりも型はやや小さい。四絃は絃巻きのところで折れる「曲頸」だが、五絃は棒状で、絃巻きはそこから枝状に左右に出ている。いわゆる「直頸」にほかならない。記録によって、こういうことがわかっているが、五絃の琵琶はほかに残っていないのである。当時(八世紀ごろ)の五絃琵琶で現存するのは、じつに正倉院のそれだけなのだ。世界唯一の貴重な存在というべきであろう。

庫車の近くには、クムトラやキジールなど石窟寺院群があり、そこには壁画が残っている。釈迦説法図や西方浄土図に、よく音楽の情景が描かれているが、そこには直頸琵琶が認められる。私はそばまで寄って見たが、絃数はわからなかった。けれども、直頸であるからには五絃にちがいない。

石窟寺を見学したあと、庫車県の人たちがアマチュアの歌舞団を招待所に呼んでくれた。ラワーブとかタトールといった絃楽器は、いずれも棒の部分の長いもので、あの西洋梨型の琵琶らしいものはなかった。

テンポの速い現代のシルクロードの音楽をききながら、私は正倉院の琵琶をなつかしんだ。胡人をのせた駱駝をあしらった、あの正倉院の五絃琵琶は、じっさいにその音色で日本の人たちをたのしませたことはなかったかもしれない。けれども、それは工芸品として、すぐれた作品である。日本の人たちは、その美しさ、デザインのみごとさに心をうたれたであろう。

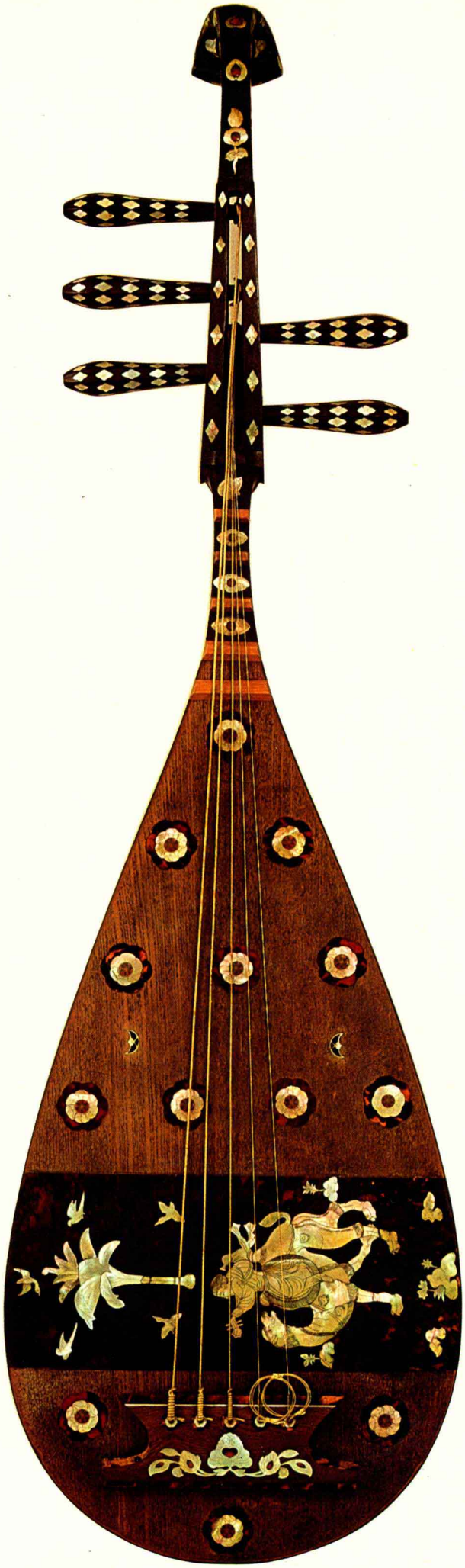
かつては亀茲琵琶と呼ばれた五絃琵琶も、いま庫車では壁画のなかに存在するのみである。シルクロードの壁画の五絃琵琶は、はるか海のむこうの正倉院の仲間に、なにかを呼びかけているかのようだった。

(作家)

シルクロード旅情　三彩／楽人をのせた駱駝(らくだ)　駱駝上で楽舞する胡人　西安出土　唐　中国歴史博物館

◀シルクロード旅情　螺鈿紫檀五絃琵琶の捍撥(かんぱち、ばちうけ)　駱駝上で琵琶を弾く胡人　8世紀　正倉院蔵

◀シルクロード旅情　楓蘇芳染螺鈿槽琵琶の捍撥　象に乗って胡楽を演奏する胡人たち　8世紀　正倉院蔵

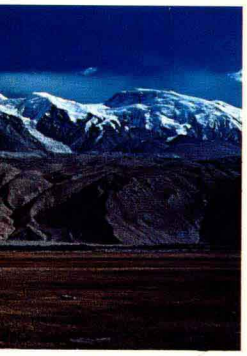


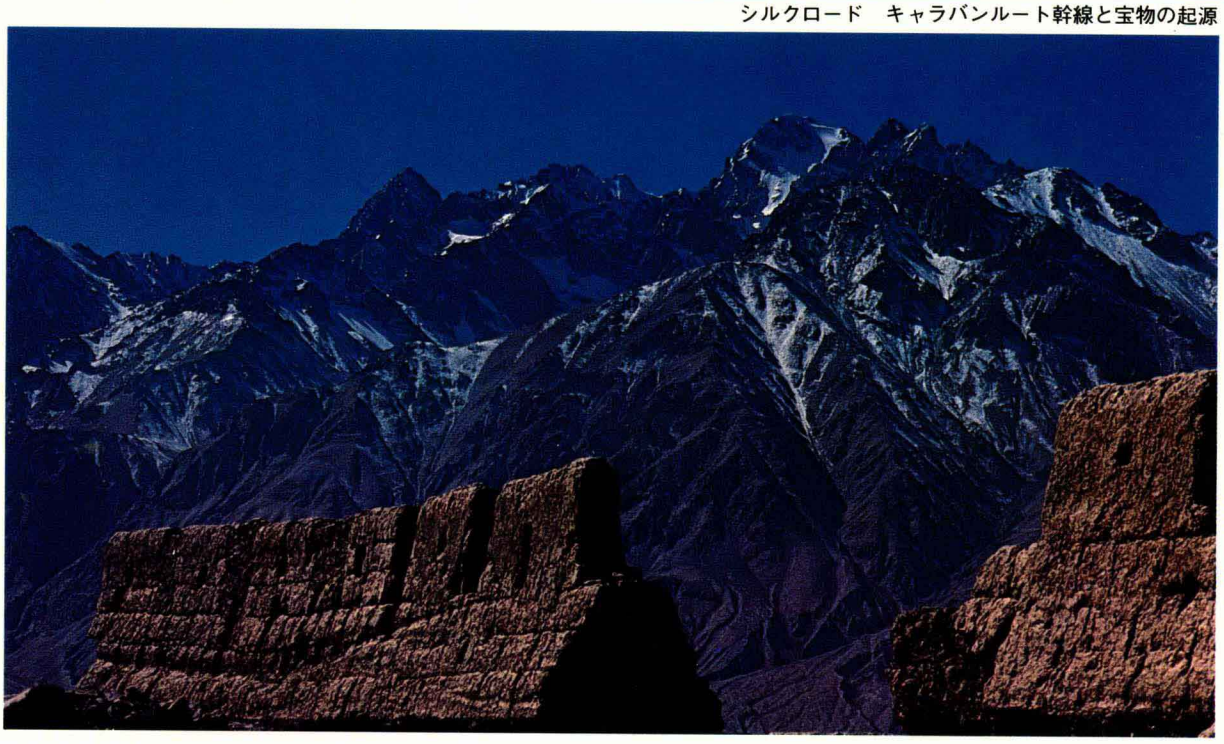
シルクロード旅情　螺鈿紫檀五絃琵琶の表面と背面　8世紀　正倉院蔵

トゥルファン
ゴビ砂漠
ローラン
敦煌
河西回廊
祁連(チーリェン)山脈
涼州
崑崙(クンルン)山脈
黄河
黄海
日本海
日本
平城京
長安
揚州
揚子江
唐
東シナ海
ヒマラヤ山脈
ガンジス川
パータリプトラ
西江
ツンコイ川
メコン川
南シナ海
林邑
0 500 1000km

シルクロード　キャラバンルート幹線と宝物の起源

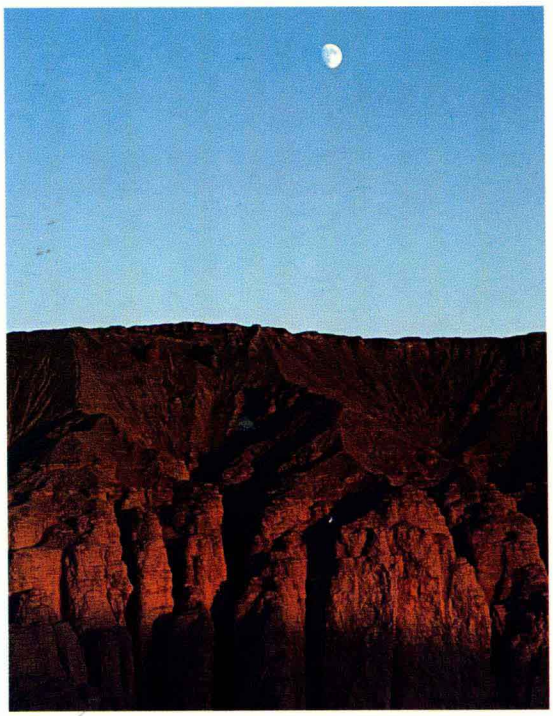
▶パミール高原　タシュクルガン遺跡
▼同右　ムズターグ連峰
◀同右　シルクロードに点在する駅



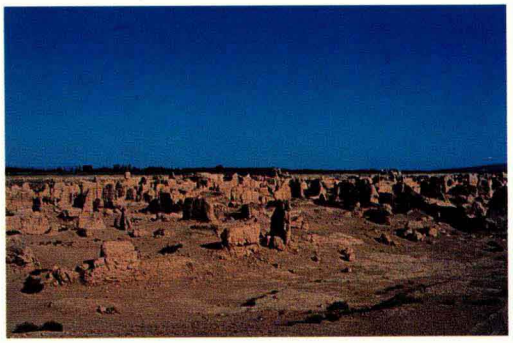


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

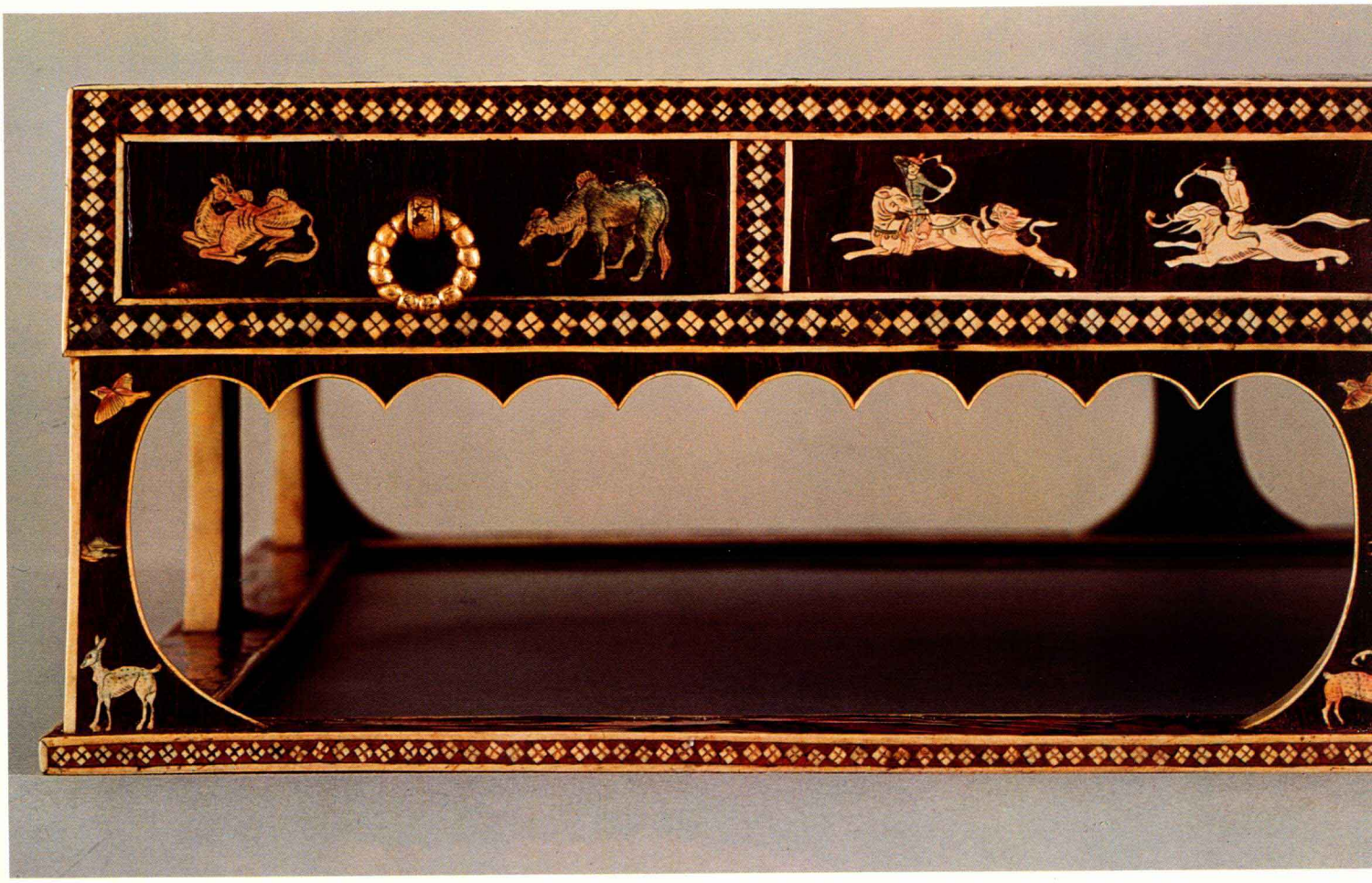
東ローマ
①④
コンスタンティノープル
黒海
カフカズ山脈
カスピ海
アラル海
バルハシ海
キジルクム砂漠
カラクム砂漠
サマルカンド
天山山脈
カシュガル
天山南路
タクラマカン砂漠
(流沙)
コペト山脈
ボハラ
シルクロード
パミール
(葱嶺)高原
アンティオキア
パルミュラ
メソポタミア
レイ(テヘラン)
カビール砂漠
ペシャワール
地中海
バクダード
チグリス川
ユーフラテス川
イラン(ササン朝)
②③⑤⑥⑦⑧⑨
イェルサレム
アレクサンドリア
イラン高原
ナイル川
ペルシア湾
インダス川
タール砂漠
エジプト
紅海
アラビア海
インド



▶トルファン　交河古城
▼タシュクルガンより見るパミール高原
◀トルファン　火焔山の夕景



シルクロード旅情　木画紫檀碁局(碁盤) の側面　8 世紀　正倉院蔵



の水さし　8世紀　正倉院蔵

かたちと素材　木画紫檀雙六局(すごろく盤)　染象牙の装飾文　8世紀　正倉院蔵

かたちと素材　佐波理水瓶　胡人面口の水さし　8世紀　正倉院蔵

かたちと素材　漆胡瓶　漆塗り鳥形口